

# 韓国語放送通訳における発話速度と 漢語系語彙の関連性

## Relevance of Utterance Speed and Sinoxenic Vocabulary on Korean Broadcast Interpretation

矢野 百合子  
YANO Yuriko



韓日通訳、放送、時差通訳、漢字語彙、速度調整

**Key words:** Korean-Japanese interpretation, broadcast, voice over, sinoxenic vocabulary, speed control

### Abstract

To examine the problems of Korean-Japanese interpretation, the investigation was made on the broadcast interpretation of Korean KBS News on NHK.

In comparison with the Korean announcement speed of 344.5 syllables per minute on average, the speed of interpreter was 475.7 moras per minute. The interpreter's speed exceeded the Japanese announcer's average, and was also 1.24 times faster than the original language. Moreover, on mora of the literal translation, it increased 1.49 times in whole sentences, and 1.79 times in sinoxenic vocabulary. Therefore, it was confirmed that sinoxenic vocabulary affected the increase of mora in the interpretation of Korean to Japanese the most. This shows that the adjustment of the sinoxenic vocabulary is the most effective measure to modulate the speed of interpretation.

Moreover, the ratio of sinoxenic vocabulary in original news was 42.7% average in political diplomatic news which greatly exceeded the average of 35.8% on 30 news items. This tendency did not change either in a literal translation and interpretation.

In both Japanese and Korean languages, sinoxenic words are used to convey contain key information. For the interpreter to maintain a comprehensible utterance speed in Japanese, concepts expressed through sinoxenic vocabulary must be compiled and summarized.

## 1. はじめに

本稿は、通訳の現場で感じてきた日本語と韓国語の言語的特徴に起因する問題、特に、両語に共通する漢語系語彙 (Sinoxenic vocabulary)<sup>1)</sup> の訳出に関連する問題をより深く考察するために、NHKBS1 で放映された韓国 KBS ニュース<sup>2)</sup> を素材に、韓国語から日本語への訳出時に増加する通訳者の発話速度に焦点をあてて、その原因を分析し、あわせて通訳者達の速度調整の傾向を調べることを目的としている。また、今後の研究のために、調査の過程で見つかった漢語系語彙 (漢字語と略す) の言語干渉 (interference)、あるいは不適切な転移 (negative transfer) についても記録する。

## 2. 韓日両語の情報伝達速度と漢字語

KBS アナウンサーのパク・キョンヒ (박경희 2011) によれば、韓国のニュースのアナウンス速度は、植民地時代の 1 分間 220 音節から 1960 年代には 350 音節に、2008 年には 370 音節に増えている。パクはまた、速度の違う 3 タイプのニュース (音節数 300、360、420) を聴かせる実験をおこない、その結果、音節数が少ないほど聴取者の理解度は高かったと報告している。2011 年のキム・ハンシク (김한식 2012a) の調査では、KBS ニュースの速度は平均値で 359.58 音節であった。一方、日本語のアナウンス速度については、放送通訳の速度について調査した木佐敬久 (1998) の論考の中に、440 ~ 490 拍 (平均 465 拍) との言及がある。木佐はこの論考で英日時差通訳を視聴者に聴かせて理解度を測る調査をおこない、500 拍以上の時差通訳は聞きにくく、視聴者が聞きやすい速度は 450 拍以下だと結論づけた。手元にある 1998 年版の『放送通訳用マニュアル』<sup>3)</sup> も木佐の調査結果を引用して、通訳者に対して、ジャーナリスティックなセンスで元の情報を取捨選択して要約することで聴きやすい速度を保つよう求めている<sup>4)</sup>。しかし、その後の研究で、NHK の夜 7 時の男性アナウンサーの速度を 390 ~ 470 拍とするもの (柴田、2007)<sup>5)</sup> や、NHK ニュース 5 本の平均値で 402.4 拍 (김한식, 2012a) とするものもあるので、最近の日本語ニュースの速度は木佐が調査した 90 年代後半にくらべて若干遅くなっているかもしれない<sup>6)</sup>。

それでは韓日放送通訳の速度はどうか。日韓間の通訳速度については、通訳大学院の学生に会議の原稿で同時通訳をさせた結果、韓国語から日本語への同通では音節数が 1.2 倍に増加し、日本語から韓国語への同通では 0.87 倍に減ったというキム・ジョンヒ (김종희 2007) の調査がある。これを通訳者はよく「韓国語は速い」と表現するが、より正確には、韓国語は日本語よりも時間当りの情報量が多いという意味になる。また、韓日放送通訳には発話速度の違いのほかに別の問題もある。日韓両語のニュース原稿を比較したチョ・ヨンジュ (조영주 2007) はそれを、略語や新造語を多用する韓国語ニュースの「含蓄性、圧縮性」と、分かりやすさを重視する日本語ニュースの「時として過度の redundancy (冗長性)」という言葉で表現した。キムとチョの指摘は放送通訳者には経験的に納得できるものだが、韓日放送通訳での原語と通訳の発話速度、とくに日韓両語に共通する漢字語と固有語という言語構成に焦点をあてた研究は見つからなかった<sup>7)</sup>。

そこで今回は、NHKで放送している韓国 KBS ニュースを素材に、原語である韓国語アナウンスと日本語への通訳の発話速度を調べ、漢字語と固有語の比率とそれぞれの拍数の増加等を計測して、日韓両語で情報の主要部分を占める漢字語と放送通訳の発話速度との間に関連性があるか、あるとすれば、通訳者たちはそれをどう処理しているかを調べることにした。

調査対象としたのは 2012 年 7 月 30 日から 8 月 11 日にかけて NHK で放送された朝 6 時の KBS ニュースである。放送のなかった日を除く 11 日間に放送されたニュースは全部で 30 項目で、担当した通訳者は筆者を含む 8 人だった。当時の通常業務では、朝 6 時の KBS は 5 分間を通訳者 2 人で担当し、放送で使う項目が決まってから放送開始までの作業時間は 100 分程度であった。しかし、調査期間はロンドン・オリンピックの特別編成で、KBS の場合は 4 分弱の放送尺を通訳者 1 人で担当することになり、そのため通訳者には、同じ作業時間内に通常の 1.6 倍の訳出をこなす、しかも同僚にアドバイスを求めることもできないという、作業面と心理面での二つの負荷がかかっていた。

時差通訳では、その時間差を利用して翻訳するだけでなく、外国の状況をわかりやすく伝えるために用語の変更や削除、追加等の手を加え、なおかつ聴きやすさに留意して情報量を抑えるという作業がおこなわれている。その結果物はいわば日本のニュース風に再構成されたもので、厳密な通訳が要求される司法通訳とは対極をなす。一方で、放送通訳者の宿命といえるのが時間との闘いで、決められた作業時間内に訳出を完了させて、放送では原語ニュースの時間内に voice over を終わらせなければならない。特別編成で時間あたりの訳出量が増えれば、それだけ訳出内容に手を加える余裕がなくなり、その結果、通常の業務時よりも、聴きやすい速度への調整が難しくなり、用語選択においても不適切な転移が現れやすくなるのではないかと考えた。

作業方法としては、同期間中に放映されたニュースを録画して放送尺を計測し、原語は KBS のホームページにあるスクリプトを音声に合わせて修正したものを使用し、通訳原稿は録画の音声を書き起こして、それぞれの実際の発話の秒数を計測した。また、比較のために使用する直訳は公正を期すために機械翻訳ソフト<sup>8)</sup>を利用し、同音異義語の変換ミスなど最低限の修正を加えたものを使用した。拍数の計測では句読点や間は無視して、韓国語では音節数を、日本語ではひらがな化して拗音とア行の小文字を除外したものを word ソフトの文字カウントで計測し、原語、通訳ともに実際の発話秒数で割って 1 分間の拍数を算出した。なお韓国語は mora 言語ではないため音節数というべきだが、本稿の目的は日本語への訳出速度の計測にあるため、便宜上、韓国語についても拍数と表現することとした。

### 3. KBS ニュースの調査結果

本稿の末尾に付す表 1 は、調査対象のニュース 30 項目のリード部分（アナウンサーがスタジオで話す冒頭部分）の原語と直訳と通訳の拍数を比較したものである。30 項目のリード部分の拍数の平均は、韓国語アナウンスが 344.5 拍、直訳が 526 拍、通訳が 475.7 拍で、原語に対する拍

数の増加は直訳で 1.34 ~ 1.67 倍 (平均 1.49 倍)、通訳では 0.92 ~ 1.48 倍 (平均 1.24 倍) となった。また通訳の拍数が、日本語で聴きにくいとされる 500 拍を超えていたものが 9 項目あり、全体の 3 分の 2 が聴きやすいとされる 450 拍を超えていた。発話速度は通訳者によって個人差が出るものだが、通常の業務時に数人の通訳者の発話の一部を手元で計測した時には概算で 450 拍前後であったことを考えると、本調査での通訳者の発話速度の増加は、通訳者の個人差よりも特別編成による作業負担の増加と大きく関わっている可能性が高い。

次に、これらの項目で①原語と直訳で拍数の差が大きいものと、②直訳と通訳での拍数の差があまり変わらないものに注目した。もちろん実際の作業では、通訳者は一旦直訳してから通訳原稿を作っているわけではなく、原語音声から通訳原稿への変換が直接おこなわれている。しかし、原語を直訳した時の拍数の増加は両言語の情報密度の差を測る一つの基準となる。前述した韓国語アナウンスと直訳の拍数の 1 対 1.49 という倍率は、大雑把に言えば、一定の時間に話される韓国語には日本語の 1.5 倍の情報が詰まっていて、それを忠実に日本語に訳出すると 1.5 倍の時間がかかることを意味している。このために放送通訳では、内容の簡略化などの調整が必要になるが、日韓両語の主要な情報が漢字語に多く含まれることを考えると、直訳での漢字語の拍数増加は通訳原稿にも相当程度反映される筈である。

しかし、表 1 では①と②に相関関係はなかった。このことは、漢字語以外での拍数増加が漢字語より大きいか、あるいは、たとえば通訳者が重複する漢字語を省略したり、拍数が少ない別の漢字語や名詞節 (ex. 判決に異議を申し立てる場合は→判決への異議申し立ては) へ置換えるなど、通訳者が漢字語で速度の調整を図っている可能性があるのではないかと考え、まず①で原語と直訳の漢字語とそうでない部分を分けて拍数の増減を調べ、次に②で通訳者による拍数の調整がどのようにおこなわれているかを調べることにした。

### 3. 1. 原語と直訳の拍数差と漢字語

表 1 では 30 項目のうち 14 項目で直訳の拍数が原語の 1.5 倍を超えている。ここではその中でも拍数が 1.6 倍を超えた項目 12 と 13、そして日本語で拍数が増えるカタカナ語 (地名人名等) が最も多かった項目 14 を例に、「漢字語」「カタカナ表記語」「その他 (固有語等)」に 3 分類して拍数の増加を見してみる。これはあくまでも原語に含まれる漢字語の調査であるため、翻訳過程で漢字化されたり、新たに追加された漢字語は「その他」に分類することとし、比較しやすいように原語に含まれる漢字語を漢字で記し、カタカナ語は下線で示した。

#### 例 1) 項目 12

原語: 選管委가 지난 総選의 公薦献金非理嫌疑로 새누리党和 先進統一党比例代表議員 2名을 檢察에 告發했습니다. 当事者들은 嫌疑를 否認했지만 大選을 앞두고 事情이 그럴 듯합니다. 김경진記者입니다. (漢字語 43 カタカナ語 6 その他 33)

直訳：選挙管理委員会がさる総選挙の公認献金不正疑惑でセヌリ党と先進統一党の比例代表議員 2 人を検察に告発しました。当事者らは疑惑を否認しましたが大統領選挙をまえに事情がそうするようです。キム・ギョンジン記者です。

(漢字語 86 カタカナ語 9 その他 36)

## 例 2) 項目 13

原語：北韓이 지난 달末에 큰 水害를 당했는데요. 유엔 (UN)이 支援에 나섰습니다. 米국은 北韓이 公式要請을 해오면 支援을 할 모양인데요. 딱 막힌 北米關係에 좀 變化가 생길까요. 워싱턴 이강덕特派員입니다.

(漢字語 28 カタカナ語 6 その他 45)

直訳：北朝鮮が先月末に大きい水害にありましたが、国連が支援にのりだしました。米国は北朝鮮が公式要請をしてくれば支援をする模様ですが、固く塞がった米朝関係にすこし変化が起きるでしょうか。ワシントンのイ・カンドク特派員です。

(漢字語 55 カタカナ語 10 その他 67)

漢字語、カタカナ語、その他の 3 グループの拍数の増加は例 1) では 2 倍、1.5 倍、1.09 倍の順で、例 2) でも 1.96 倍、1.66 倍、1.48 倍の順となり、やはり漢字語が拍数の差に大きく関係していることがわかる。また機械翻訳ですでに公薦非理嫌疑（公認不正疑惑）、北米関係（米朝関係）等の置換えと、選管委（選挙管理委員会）、大選（大統領選挙）、北韓（北朝鮮）等の省略語の補正がなされていて、これもまた拍数を増やす原因となっている。次にカタカナ語が多い例を見る。

## 例 3) 項目 14

오늘은 気分 좋은 올림픽 소식으로 시작합니다. 펜싱代表팀이 런던의 奇跡을 만들어냈습니다. (男) 네, 男子 사브르 団体戦에서 루마니아를 꺾고 金메달을 따내면서, 올림픽 通算百 번째 金메달의 主人公이 되었습니다. 런던에서 정현숙 記者입니다. (女)

(漢字語 21 カタカナ語 27 その他 48)

今日は気分よいオリンピックの便りで始めます。フェンシング代表チームがロンドンの奇跡を作り出しました (男)。はい、男子サーブル団体戦でルーマニアを下して金メダルを勝ちとり、オリンピック通算百回目の金メダルの主人公になりました。ロンドンからチョン・ヒョンスク記者です (女)。

(漢字語 36 カタカナ語 49 その他 55)

例 3) では拍数の増加はカタカナ語 1.8 倍、漢字語 1.7 倍、その他 1.1 倍の順になったが、通訳時に省略可能な末尾部分を除くとカタカナ語も 1.7 倍で漢字語と並ぶ。その他のニュース項目においても、直訳時の漢字語の拍数増加は 30 項目の平均で 1.79 倍 (1.54 倍～ 2.09 倍) と、文章

全体での拍数増加率の1.49倍を大きく上回った。以上のことから、ニュース原稿の韓日訳で拍数増加に最も影響するのは漢字語であり、カタカナ語の影響は思いのほか少ないことがわかった。

### 3. 2. 直訳と通訳の拍数差と漢字語

前述した例1)と例2)は、直訳の拍数が原語の1.6倍を超えたにもかかわらず、通訳では1.26倍、1.35倍と拍数が減っている。反対に、直訳では30項目の平均値(1.49倍)以下でありながら通訳原稿では拍数が直訳の94~103%とほとんど変化しなかったのは次の3つの項目で、しかもそのうち2項目では直訳よりも拍数が増えていた。通訳者の意図的変更と思われる部分を棒線で示す。

#### 例4) 項目6

直 訳	通 訳
米国が、 <u>韓国家電会社</u> らが韓国とメキシコで生産した洗濯機に対して、総、十億ドルの反ダンピング予備関税を <u>賦課</u> しました	<u>アメリカは韓国の家電メーカー</u> が、韓国とメキシコで生産した洗濯機について、合計で十億ドルの反ダンピング予備関税を <u>課すこと</u> にしました
最終決定は来年一月に下されると見られます	最終決定は来年1月に下される <u>模様</u> です
チェ・ギュシク特派員です	

例4)は末尾のリポーター紹介以外はすべて主要情報といえるほど情報密度が高く、しかも「家電メーカー」「~することにした」等の日本語らしい表現方法に変えたことで、前半の拍数が大きく増えた。通訳者はその分を後半で削って速度を調整している。

#### 例5) 項目9

ソウルには今日も暴炎が <u>続</u> っていますが、 <u>チェジュ</u> には今台風警報が <u>下</u> されています(男)	ソウル市などでは今日も猛暑が <u>予想</u> されています。 <u>一方チェジュ道</u> には現在、台風警報が発令されています
はい、10号台風ダムレイがチェジュ南側海上を通りすぎていますが、 <u>状況</u> はどうか聞いてみます。 <u>ソギポ</u> につなぎます(女)	台風10号は <u>チェジュ島の南の海上</u> を通過中です。 <u>チェジュ島のソギポ市</u> と中継が繋がっています。
チェ・ヨンユン記者、風がとても多く吹いているようですね(女)	チェ・ヨンユン記者。 <u>現在の状況</u> を伝えてください

例5)は直訳より拍数が増えた例である。男女の掛け合いで問投詞が入るなど、例4)に比べると情報密度は若干落ちるが、情報の正確さや分かりやすさに通訳者は問題を感じたようだ。冒

頭の変更は、次にくる項目が「大部分の地方で熱帯夜」であることや、朝6時という時間帯を考  
えての意識だろう。また、「一方」を挿入して地域の移動を強調し、ソウル市に対応する行政名の  
「チェジュ道」、台風の位置では「チェジュ島」と使い分け、日本で知名度の低いソギポ市には位  
置情報を加えて、結果的に抜け落ちた部分は末尾を入れ替えてカバーしている。今回調査した30  
項目では最も大胆な意識だが、これらの処理の結果、拍数が原語の1.47倍に増えて速度調整がで  
きず、通訳者はリード終わりの画面切り替えを利用して、原語より1秒多い尺を1分間540拍の  
高速で乗り切っている。当日はオリンピック報道でKBSのニュース開始時間が大幅に遅れて、十  
分な作業時間がなかったことが影響しているかもしれない。

例7) 項目27

最近ハンガンとナクトンガンの <u>急速な緑藻拡散</u> は四大河川事業で水の流が遅くなったためという主張が出てきました	最近、ハンガンやナクトン川などで <u>大量の藻が発生</u> しているのは四大河川事業で川の流が遅くなったからだという主張が出ています
しかし <u>環境部</u> は科学的根拠が不足していると <u>反駁</u> していて論議が予想されます	しかし <u>環境省</u> は科学的な根拠が十分ではないと <u>反論</u> しており、論議が予想されます
ナ・シナ記者です	

例7)も1拍だけだが直訳より拍数が増えている。例4)と同じく情報密度が高く、ニュース内容も初出の話題だった。日本で知名度のない河川を「〇〇川」と変更し、音声では分かりにくい「緑藻」を「藻」に変えて、「急速な拡散」を「大量の…発生」と言いかえている。「反駁」から「反論」への変更も分かりやすい。しかし情報量の多さからやはり拍数調整できず、523拍と高速になっている。この3例に共通するのは、ほとんど枝葉のないタイトな内容である。

比較のために、直訳と通訳の比較で拍数が大幅に減った例をふたつあげる。

例8) 項目11

<u>履き物工場</u> で火事が起こりましたが、 <u>人命被害を確認</u> していた消防官がこの工場の建物から落ちて亡くなりました	工場で火災が発生し <u>作業にあたっていた消防隊員</u> が工場の建物から転落し死亡しました
残念な消息、ソン・スジン記者が伝えます	

例8)は例5)と同じ通訳者で、やはり大胆な意識をしているが、通訳の拍数は直訳の64%まで減らしている。これは棒線部が上位語（上位概念）で括れる内容で、リードに続く現場リポートの中で十分に説明可能であったことが大きい。次の例9)も前半で現在進行中の大会名を加えて主要情報を整理し、後半では過去の詳細を省いてすっきりとまとめることで、拍数を直訳の77%にとどめている。

例9) 項目7

柔道でついに金メダルが出ました。キム・ジェボム選手がその主人公です	ロンドン・オリンピックの柔道でキム・ジェボム選手が金メダルをとりました
圧倒的な競技で4年前北京オリンピック銀メダルの恨みをはらしました	圧倒的な試合運びで4年前の雪辱をはたしました
キム・キボム記者です	

例8)と例9)は原語と同じ秒数、または1秒程度の差であれば、日本語の聴きやすい速度とされる400～450拍で十分に対応できる拍数になっている。しかし、意外なことに、このふたつの項目は、実際には原語より3秒短い尺でそれぞれ550拍、502拍という高速で読み上げられていた。時差通訳で通訳者が尺を残して高速で読み上げてしまうのは、前の項目の速度が速くて急にトーン・ダウンできない場合や、十分な読み練習ができずに放送時間が来てしまい、通訳がこぼれる(原語終了までに終わらない)ことへの不安から、焦って早口になる場合などがある。通訳者の個性もあるので一概には言えないが、通訳者が専門家相手の会議同通の速度に慣れてしまっていて400拍前後を遅すぎると感じている可能性もあるだろう。この問題については、十分な作業時間がある場合との比較が必要なため、ここでは可能性の指摘にとどめておく。

30項目全体の直訳と通訳の差をまとめると、原語に対する拍数の増加は文章全体では直訳で1.49倍、通訳では1.24倍であったが、原語に含まれていた漢字語の拍数の増加は直訳では1.79倍、通訳では1.36倍であった。また、漢字語が文章全体に占める割合は、原語が平均で35.8%(17.2～55.7)、直訳が42.9%(18.6～65.2%)、通訳では39.8%(16.2～56.7)となった。これは原語にある漢字語がどの程度まで残されたかという、いわば漢字語の残存率を示す数字だが、原語で漢字語が40%を超えていたのはすべて政治・外交関係のニュースで、直訳と通訳でもこの傾向は変わらず、とくに予備選挙関連の項目3では、漢字語の比率が原語で49.2%、直訳で65.2%、通訳でも58.8%に達していた。一方、通訳者間の漢字語の処理方法には有意の差は見られなかった。

#### 4. 漢字語レベルの言語干渉

同時通訳学習者を調査したイ・ユア(이유아 2008)は、日韓両語の言語駆使能力が似通ったレベルである場合に、母語とは無関係に日韓・韓日の両方で言語干渉がおこることを指摘し、特に音声や語彙レベルで漢字語に干渉が多いとしている。筆者の経験では、日韓間の音声レベルの干渉は「교류(kyo-ryu)/交流」のように一方の語に半母音が添加された発音や、「신분(sin-bun)/身分」のように日本語の音読みが韓国語と同音である場合に多く、語彙レベルの干渉は、たとえば「초속(秒速)30m/風速30m」のように、日韓両語で第一義の用法が同じ漢字語が、他の名詞との結合時に似て非なる語彙と結合する場合に多い。また해일(海溢)のように日本語で「津波」「高



潮」の訳し分けが必要な語彙では、Seleskovitch (2009) の指摘する「頻繁に使われる語義が記憶にあった時」に該当する干渉が起こる。一方で、「八方美人」や「多情」のように、両語で語義あるいは第一義の用法が異なる漢字語では干渉はほとんどおこらない。

調査対象とした 30 項目でも、公薦(公認)、非理(不正)のように日韓で異なる語彙を単独で用いる例や、「検察に出席(出頭)」、「警報が発効(発令)」のような、明らかに用法が異なる語彙では干渉は起こらなかったが、サッカー関連項目の「最後の훈련(訓練)/練習」で干渉が起こっていた。また、不適切な転移といえるか微妙な例としては「登山客が실신(失神)し」「반덤핑 예비관세(反ダンピング予備関税)」があり、放送原稿を十分に検討する余裕があれば、「登山客が意識を失い」「反ダンピング税を適用する仮決定」等、より放送に適した表現への置き換えが可能であったと思われる。また、この期間には 4 月にあった総選挙での不正疑惑と 12 月の大統領選挙にむけた予備選挙(及び、予備選挙に出る候補者選び)という二つの選挙関連ニュースが重なったため、一部の訳出に若干の混乱があった。

## 5. まとめ

今回調査対象とした韓国語ニュースのアナウンス速度と日本語放送通訳の速度は平均で 344.5 拍と 475.7 拍で、通訳の拍数は原語に比べて平均 1.24 倍増加していた。通訳では 500 拍を超えたものが 30 項目中 9 項目あり、全体の 3 分の 2 が聴きやすいとされる 450 拍を越えていた。これは通常より作業負担が大きかったことの影響を加味しても、今後検討すべき課題と思われる。

また、原語と直訳の拍数の差は文章全体では 1.49 倍であったが、漢字語では 1.79 倍で、韓日放送通訳の拍数増加に最も影響するのは漢字語であることが確認できた。これは通訳者の速度調整には、漢字語の調整がもっとも効果的であることを意味し、実際に通訳者は、放送原稿の拍数を文章全体では直訳の約 83%、漢字語では約 76%にとどめて拍数を調整していた。

一方で、原語ニュースにおける漢字語の比率は政治・外交ニュースでは平均 42.7%と、30 項目の平均 35.8%を大きく上回り、直訳と通訳でもこの傾向は変わらなかった。これらのニュースは原稿の構成も圧縮的で含蓄に富み、通訳者が日本でなじみのない用語や省略語に説明的な言葉を加えざるをえない場合も多い。今回の調査項目ではないが、たとえば、パク・クネ候補は 5.16 と維新、人革党事件について国民に謝罪したという文章に遭遇した通訳者は、セヌリ党の大統領候補者パク・クネ氏は、父親の故パク・チョンヒ大統領が軍事クーデターで政権について独裁政治を敷いたことや、人民革命党事件で人権を弾圧したことについて国民に謝罪したという、日本語では膨大な拍数に膨れ上がった情報量を前に頭をかかえることになる。このような政治・外交ニュースの場合にはとくに、漢字語のもつ情報を抑えるために、残すべき最重要情報をどのように見きわめ、上位概念でいかにまとめていくかが、韓日時差通訳での発話速度を聴きやすい日本語速度に近づけていく鍵となるのではないだろうか。

表1 30項目のリード部分の拍数

The table content is completely redacted with a solid dark gray block, making the data unreadable.

## 注

- 1) 本稿では、日本と韓国で現在使用されている和製漢語を含む漢字語(Sino-Korean)と漢語(Sino-Japanese words)を指す。
- 2) 韓国 KBS ニュースの時差通訳放送は 1988 年 4 月に NHK ソウル支局で始まり、1992 年 4 月から東京でも開始された。現在は、朝 6 時と正午のニュースを東京の通訳者が、夜はソウルの通訳者が担当している。ソウルと東京では準備作業に若干の違いがあるが、東京での作業は番組の視聴に始まり①項目タイトルと尺(time)の記録、②使用項目の決定、③使用項目の要約、④音声からの訳出と尺の調整、⑤放映時に読みあげ(Voice Over)の順である。
- 3) 『放送通訳用マニュアル』は派遣元である NHK 情報ネットワーク(現在は NHK グローバル・メディア)が通訳者用に作成した冊子で、この 1998 年版以降は作成されていない。
- 4) 筆者が放送通訳を始めたのは 1994 年からだが、開始前のガイダンスで言われたのは「高齢者が聴き取れる速度、中学生が理解できる内容で出してほしい」であった。
- 5) 柴田の論考は、災害時などの非常時のニュース音声についての考察で、柴田はこの 390 ~ 470 拍の速度では、児童や外国人等を含むすべての聴取者に対応するには速すぎるとしている。
- 6) 試しに NHK オンラインでいくつかのニュースを計測した結果は 450 拍前後だった。
- 7) 日韓間の通訳翻訳研究はこれまで主として韓国でなされてきたが、研究の状況を整理したキム・ハンシク(김한식 2012b)によれば、その 81%は翻訳研究で、キムが確認した 294 の論文で、通訳に関するものは 48 本、通訳・翻訳に関するものが 8 本で、学位論文でも 117 本中、通訳 17 本、通訳翻訳が 5 本となっている。
- 8) 翻訳ソフトは高電社の j・Seoul 対訳エディター V8.00 を使用した。

## 参考文献

- 조영주 (2007) 「방송 통역에 관한 고찰 — KBS 뉴스의 일본어 시차통역을 중심으로 —」 『일본어학회 『일본어문학』 39, 145-168 (조영주 「放送通訳に関する考察 — KBS ニュースの日本語時差通訳を中心に」 『日本語学会 『日本語文学』 39, pp. 145-168)』
- 木佐敬久 (1998) 「放送通訳の聞きやすい速度とは？」 NHK 放送文化研究所 『放送研究と調査』 1998 年 3 月号, pp. 40-63
- 김한식 (2012a) 「방송통역의 충실성과 이해용이성」 『한국일본학회 『일본학보』 90, 15-24 (김·한시 「放送通訳の忠実性と理解容易性」 『韓国日本学会 『日本学報』 90, pp. 15-24)』
- 김한식 (2012b) 「한국에서 일본어 통번역 연구의 현황과 과제」 『한국일본학회 『일본학보』 91, 79-89 (김·한시 「韓国での日本語通訳研究の現況と課題」 『韓国日本学会 『日本学報』 91, pp. 79-89)』
- 김중희 (2007) 「동시통역 수행시의 음절수 증감에 관한 연구」 『대한일어일문학회 『일어일문학』 38, 39-47 (김·중희 「同時通訳遂行時の音節数増減に関する研究」 『大韓日語日文学会 『日語日文学』 38, pp. 39-47)』
- 이유아 (2008) 「동시통역 학습자의 통역 오류에 관한 고찰 — 언어간섭현상을 중심으로」 『대한일어일문학회 『일어일문학』 37, 99-117 (이·유아 「同時通訳学習者の通訳誤謬に関する考察 — 言語干渉現象を中心に」 『大韓日語日文学会 『日語日文学』 37, pp. 99-117)』
- NHK 情報ネットワーク (1998) 『放送通訳用マニュアル』
- 박경희 (2011) 「뉴스 전달 속도와 이해도는 반비례」 『미디어포럼 『신문과 방송』 2011. 4. 84-89

(パク・キョンヒ「ニュースの伝達速度と理解度は反比例」メディア・フォーラム『新聞と放送』  
2011年11月号 pp. 84-89)

ダニツァ・セレスコヴィッチ (2009)『会議通訳者 — 国際会議における通訳』(ベルジェロ伊藤  
宏美 訳) 研究社 [原著: Danica Seleskovitch (1968). *L'interprète dans les conférences  
internationals. Lettres Modernes*]

柴田実 (2007)「災害時に使うための日本語音声」NHK放送文化研究所『放送研究と調査』2007  
年7月号, pp. 84-94